

場所は〇×ソフトウェアにあるリフレッシュルーム。冒頭にあった難題プロジェクトも落ち着きを取り戻し、なんとか軌道修正を行えたように見えた午後のひと時であった。

そもそも例の件は、部長の奨めたソフトウェア開発会社のチームが問題をおこしたわけであって、あれ以上の被害拡大を防ぐには当然の判断であったはずだ。なのに、なぜ頭を下げにいかねばならないのだろうか……。

三沢は、ぼうつと窓の外を眺めながら先日手にした書籍のことを思い出していた。

「そういえばあの本……兵法だったかな？あのようなことが実際にできるのだろうか……いや、そんなにうまくいくはずがないだろう。」

そういったかと思うと、

「いや、しかし、やり方次第ではあるか……。だいたい“準備をおろそかにして事をおこすからダメなのだ”と書いてあったじゃないか。うん。」

こんなことをつぶやいていては、小さくうなずいたり首を振ったりしていた。

座席にもどると、源が手持ち無沙汰の様子でうろろしている。

「どうした？誰か待っているのか？」

声をかけてみると、とんでもない返事が返ってきた。

「大俵課長が『後はまかせておきなさい』って……。エリカはなにをすればいいんでしょうか？」

「なにをすればって……。」

この言葉尻にもあきれたが、それよりも大俵課長の対処がいただけじゃない。聞けば、かなりの腕前をもつ技術者集団がいる会社のスタッフを使い、やっと軌道修正し終えたばかりのプロジェクトに投入したというのだ。

「まさか……この期に及んで『技術がプロジェクトを救うのだ』とか、そういうことを考えているんじゃないだろうな？！」

この前の件では黒崎部長の『人海戦術』のおかげで大変な目にあったばかりだ。ソフトウェア産業ではいたずらに人を集めたところでなんの意味をなさないというのに、だ。

今回の件は、別の意味でまずい。

やっとチームワークというものを取り戻しつつあり、プロジェクトの目的意識を分かち合えてきているというのに、そんな技術偏重な連中が入ってきては、すべてが無に帰ってしまう。三沢は急いで現場へ向かった。

「やあ、三沢くん。なにをそんなに慌てているんだい？」

大俵課長がさえぎるように立ち上がり、声をかけてきた。

「課長、話に聞きましたが、私のプロジェクトチームに新規人員を投入なされたとか？」
「ああ、あれね。別のプロジェクト予算をうまくやりくりして捻出したんだよ。なにせ有名どころのコンサルタントを呼ぶんだから、本当に苦労したよ。」

「待ってください、課長！曲がりなりにもプロジェクトリーダーである私になんの相談

もなしというのはあんまりじゃないですかっ?!」

大俵は少しおどろいた表情して見せた。

「おやおや、これは心外だなあ。私は良かれと思ってやってあげたんだよ?」

プロジェクト・マネージャ

P M

を兼務している手前もあるしね。だいたいきみは一度失敗しているんだろ?」

「う・・・それは・・・。」

「言い訳は見苦しいぞ、三沢くん。少しはわたしのやり方を見て問題解決の方法というものを勉強してみてはどうかね? 若いうちは先人に学ぶものだぞ。」

「(くっ...)・・・わかりました。」

こみ上げる怒りを抑えつつ、ゆっくりと現場へ向かってみた。そこには機械的な作業を淡々とこなす、流れ作業のような雰囲気があった。

「これが・・・会社のため・・・だと?」

あれだけ活気のあった先週末までの現場が、瞬時にして組立工場と化してしまっていた。あるプロセスのマニュアルに沿った手法。技術員のレベルや知識には無関係な管理体制。なにかの図の矢印先にある『ゴール』の文字。

「ああ・・・彼らのうち、いったい何人が会社に残ってくれるのだろうか・・・。」
(・・・!!)

三沢は決めた。兵法というものが通用するならば、今この状況を打開するためにやってみようではないかと。

「(そういえば、【論語読みの論語知らず】というのも書いてあったな・・・。)」
すこし苦笑いをしたあと、

「よし、やってみるか!」

と、きりつと向きなおし、自分と仲間の将来を夢見ながら帰路へついたのであった。

“ 先ずは情報収集につとめよ ”

三沢は兵法書に情報戦が重要だと書いてあったことを思い出し、このようなメモ書きを手帳に記した。

「よし、先ずは現場の状況を把握することからはじめるか。」

パタンと手帳を閉じ、ウンとうなずいたかと思うと、さっそくヒアリングを開始した。

「あれから順調なようだけど、なにか問題はないか？ささいなことでもいいから話してくれ。」

みなが顔を見合わせ、現場は少しざわついた。スケジュール的にも成果的にも、これといった問題はないはずなのになぜこのようなことを聞かれるのだろうかといった感じた。

「そういえば・・・」

ひとりが口を開いた。

「そういえば、エリカはどうしてます？この前までよくペアやってたから、すごく気になっちゃって・・・」

そういえば、彼女はよくペアになっていた気がする。よく気があったのか、楽しそうにプログラミングしていたように思う。思えば、XPという開発手法を用いようとしたとき、真っ先に“ペアプロ”ってなんですか？」と、興味深そうに質問してきたのも彼女だった。

「XPじゃなくなってからは、なんていうか・・・楽しくないっていうか・・・仕事でこんなことやってちゃダメなんだけど。」

そんなことを話し出した。

「この前のXPでも十分に成果が出ていたのに、どうして変わったんですか？」

別のものが質問してきた。ここにすかさず城之内が口をはさんだ。

「ふん、あんなまがいもの、たまたまうまくいっただけに決まってるだろ？ねえ、係長。」

「え？あ、ああ・・・そ、そうかな？」

三沢は窮した。あれは、三沢が書籍を読んだだけで実践してみたもので、まがいものといわれても言葉を返せなかったのだ。疑問符にするのが関の山だった。

「そもそもゴールも決めずに短期リリースでごまかそうとするとところが僕的にいけない。あんなのはできないプログラマーが小さな部品作りでごまかしているに過ぎないだ。」

ひどい言われようだが、きちんとしたワークショップでの経験もなく、ただ読みかじった知識だけでやったのがいけなかったのだろう。城之内は鬼の首を取ったかのようにふんぞり返り、ホワイトボードの図を指しながら続けて語った。

「その点このプロセスはいい。あんなできもしないプラクティスを並べるよりも、確実に富んでいる。そもそもソフトウェア開発とは工学的なものなんだ。システムの仕組みをしっかりと設計して・・・」

またはじまった。彼の講釈好きには困ったものだ。今日のところはここまでにして、先の策を練ろう。もとより今回の目的はチームの意識を一つにし、次にひかえている案件に

向かうための前準備をおこなうためなのだ。そのためにも、今のプロジェクトをステップにし、スタッフの意識統合につとめ、課長の意のままに左右されないようにしながら部長の政治力にも屈しないチーム、いや、組織を作らなければならないのだ。

だいたいにおいて、まわりには特殊な人材がそろいすぎている。

先輩とはいえ、同じ職位にいる人気取り男。※「ん？」といった顔を思い浮かべる

やさしい顔をしてなにかたくらんでいる課長。※「ほっほっほっ」といった顔を思い浮かべる

とにかく、「傲慢」という二字はこの男のためにあるとしかいえないというような部長。

※「なにか文句があるのかね？」といった顔を思い浮かべる

人はいいけど安請けあいして現場を窮地に追い込んでしまうイケさん。※「ごめんね、どうしても断れなくて・・・」といった顔を思い浮かべる

自社スタッフでもそうなのに、協力会社ならなおさら傲慢な態度を見せる小高。まあ、彼女は鮫島の配下だからいいが。(いや、よくはないか) ※「ふん、馬鹿を馬鹿と言って、なにが悪いの?!」といった顔を思い浮かべる

なにことも“勢い”で解決しようとする大河内さん。ま、彼も別の島だが。 ※「おれもおまえも、苦しいのはいっしょだぞーっ!!」といった顔を思い浮かべる

エリート系で、何かと我を通したがる城之内 ※「システムティックに考えましょうよ。だいたいですね・・・」といった顔を思い浮かべる

やる気がない三年目、浦成。そしてよくわからん一年目、源。 ※「はあ。そうですか。」といった浦成の顔と、「え〜? エリカ、頑張ってますよお?」きよんとした顔を思い浮かべる。

しかし、個性がきついほど戦術は決めやすいものだ。あえていうならば、浦成のようなやつをどう使うかが問題なくらいだろう。

「・・・ひとつ、戦略でも練ってみるか。」

パラパラと兵法書をめくってみるのだった。